

わたしの飛驒



早船ちよ

わたしの飛驒

早船ちよ

わたしの飛驒

一九七五年二月一日 第一刷発行

著者 早船 ちよ

装幀 柳 宗 理

発行者 早船栄莖生

発行所 株式会社けやき書房

東京都杉並区久我山二の一〇の四（〒一六八）
電話 東京〇三―三三四―七七二八 振替 東京一二五三三一

印刷所 誠和印刷株式会社

落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

©早船ちよ 一九七四

わたしの飛驒

目次

ふるさと再発見 7

ふるさと文化の証し 8

雪おんなの幻想 8 / 春はアズキ菜 10 / 夏は高山 13 / ふるさと文化の証し 14

魚の泳ぐ川 19

魚影あざやか 19 / 禁漁区 22

夏の飛驒路をいく 26

郡代屋敷・米蔵のある町 26 / 飛驒一宮から鈴蘭峠へ 30 / 巖立と唐谷 31 /

鈴蘭高原から濁河へ 33

母なる川をさかのぼる 36

「悠長さ」の形成をみつめて 36 / タイムトンネルを掘る 40

鹿の子ゆり 44

鹿の子ゆり 44 / 高山の朝市 46 / 鳩ヶ谷のボロ市 49 / 川口の植木市 51

旅のよさ 53

旅のあじわい 53 / またきてみたい旅を 55

朴葉みそ 59

山家料理の正月 60

山家料理 60 / 町屋料理 65

朴葉みそ・祭のあとふき・アユ雑炊 69

朴葉みそ 69 / 祭のあとふき 72 / サワガニとアユ雑炊 74

飛驒路うまいもの 80

思いだすままに 80

献立くらべ 85

嘉念坊 85 / 洲さ起 86 / 角正 88 / 荷売屋メニューなし 91 / つけたりひとつ 92

■天^あ生^も峠⁹³

天生峠 94

でっかい庭に 94 / ダム水没の小鳥溪谷 97 / 匠屋敷まで 900メートル 101 /
すばらしい自然林 105

クマを追う 109

■木曾路から飛驒路へ 117

馬屋敷の優雅な生活 118

かくれ里の大馬地主 118 / 馬屋敷とその当主 124 / 木曾馬から肉牛へ 148 / 日和
田に生きる 152 / 仔牛市場へ 167

木魂が呼ぶので 181

奥飛驒の里 189

奥飛驒の里 189／負ねる 191／バンドリの佐古さん 193／匠屋敷跡 195／秋近い風 197

合掌造りの集落 198／ふるさとと駅 200

ぼたん花赤く咲き 203

ははのふるさとの川 203／はるの娘のころ 209／父のふるさとの谷川 210

飛驒しとに育しとなる 215

さいしよの童話、小説 216

処女作いぜん 216／さいしよの童話と小説 218／「松葉牡丹の種子」 219／「帰

途」 221

わたしの読書・集書 223

「峠」をこえて 227

『若草』のおもいで 231

作品群の二つの流れを 238

飛驒観光ゼロ年 241

あとがき 248

著者 早船 ちよ

一九二四年、岐阜県高山市に生まれる。高山女子高等科卒業。「キューボラのある街」で日本児童文学協会賞・厚生大臣賞、「ポンのヒッチハイク」でサンケイ児童出版文化賞受賞。児童文学雑誌『子ども世界』を創刊、児童文学から小説まで、幅広く活躍している。

主な作品に「花どけい」「つばさある季節」「キューボラのある街」五部作、ライフワーク長篇小説「峠」「湖」「街」、「おばけのオンロック」「ふるさと飛騨」「いさごむしのよっこちゃん」「春のシュトルム」「あけみの門出」などのほか、多数の作品がある。

装幀 柳 宗理

一九一五年東京生れ、東京美術学校洋画科卒業。インダストリアル・デザイナーの第一人者。毎日新聞社主催の第一回工業デザインコンクール第一席受賞、第十一回トリエンナーレ展（ミラノで開かれる国際デザイン展）でゴールド・メタル受賞の他、数々の賞を得ている。主な作品に、札幌オリンピックの聖火リレーのトーチホルダーおよび水泳競技場内の座席のデザイン、また、スプーン、食器、玩具のデザインと幅広く製作活動し、多数の作品がある。

ふるさと再発見

ふるさと文化の証し

雪おんな幻想

飛驒高山の冬は長い。十一月ごろから四月まで、半年ちかく、深い雪に埋もれて、冬ごもりをする年さえある。戦後には、雪のない正月も、たびたびあったが、大正末期から昭和はじめへかけて、わたしの子どものころは、雪がようけ降った。

——正月あええ、盆よりあええ、雪のようなあつぽ食って……。

正月と雪とは、切りはなせない気がした。

「高山で、いちばんいい季節は、いつかしら？」

と、聞かれると、つい、

「雪国ですもの。雪のたんとある冬が、いちばんですね」

と、じぶんの感じをいってしまふ。いまは、べつの意味でも、そう考えている。

雪は、プレハブの屋根も、新建材の外壁すらもおおいかくすし、アスファルト舗装の国道を、昔ながらの街道にもどす。プラスチックの街灯のかさに、ぼったり雪がつもると、大正初期のガス灯のような詩情を感じさせる。そこへ、高山通いの古川ぼっか（最後のひとりが現存）が、飛驒犬に雪ぞりの共づな曳かせて通りすぎようものなら、時間と歴史が後もどりして、古い飛驒が再現する。

しんしんと更ける吹雪の夜。こたつにあたって、凍みたみかんや、福引きせんべいなど食べ、歌留多をとったり、昔ばなしをしったりしていると、遠くで、どどどどと、雪鳴りがしたものだ……。

やがて、街かどから、哀調をおびた寒念仏のご詠歌、鈴の音が、近づいてくる。ゼニ一銭か二銭、米なら一にぎりを持って、大戸をあけて待つ。寒行の行列は、雪をまっ白にかぶってくる。紫のお高祖頭巾に被布、高い木履をはいて、心細げな提灯の火を、袖垣でかこう。雪女の幻想は、おおかた、こんなときに生まれたのであろう。

一月のなかばに、親鸞上人のお速夜がある。山門には、法会の大提灯がよっぴて、あかあかと灯り、同行衆が、凍み雪をきゅっきゅつと踏んでお詣りに集まる。

高山の街では日常に、そして飛驒各地の祭りや行事にはいまでも、提灯が生きて使われて

いる。それは、古い文化がだいじに、つや布巾かけて保存されている証しのようなもの。どんな美しいもの、いいものも、ついに滅びるのは必然としても、ゆっくりした時間枠のなかで風化し、惜しまれて失うなる……、そういう文化が、高山には残されている。その日本のふるさとのすがたをたずねて、人びとは集まってくるのだらう。さいきん、どこも公害による腐蝕と磨滅のひずみがひどくなっているので、なおさらである。

春はアズキ菜

雪どけの三月末から四月。華やいだ陽ざしに、かげろうがちらちらと舞う。土が急激にかわいていく。その春さきの土の匂いに、はじめて、フキのとうを見つけた喜びは、長い雪ごもりをしたものだけが知る心であらう。家のなかになんか、じっとしておられん。

——アズキ菜摘みにいかまいか。

——ひなさまのアサツキ掘りにいかまいか。

フジ蔓やアケビ蔓で編んだあじか（小さなかご）のひもを腰にゆわえつけて、野外へ出かけていくのである。

四月三日は、月おくれのひな祭り。

——ひなさま、見せとくれ。お、お、お、お、ほめるに。

紅殻塗り、出ん格子ぐしづくりの古い町家の、みせ（街道に面したへや）の障子が、あけはなつてある。昔から伝わったひなさまが、緋もうせんのひな壇にへやいっぱい飾ってあり、外の通りから見えるようになってゐるのだ。子どもたちは、ひなあられを入れた小かごを手に、きれいな水の流れる溝みぞをまたいで、戸毎に、ひな壇をのぞいて見ていく。

高山市では大坪家、古川町では渡辺家に、格調ある、いい顔のひなさまが残っている。

ひな祭りがすぎると、梅、桃、桜が、いちどきにひらき、春風にのつて祭り囃子のけいの、笛・太鼓の音がどこからか流れてくる。

高山駅まえには、「高山祭り」の大提灯と、のぼりが立つ。春の山王さまの祭りは、四月十四、十五日。宮川をはさんで東の古い高山の街の川上かわかみ半分が氏子である。川下かわしも半分は、秋十月なかばの「高山祭り」、八幡神社の氏子である。

春と秋の「高山祭り」には、各町内の屋台倉から、山王祭りには十二台の、八幡祭りには十一台の屋台が、街へ曳きだされる。

「けんらん豪華」とか「動く陽明門」とか形容されるが、それぞれに個性的な美術工芸品でもある。いまでは、ひとつの町内でこれだけのものをつくる財力は、日本じゅうのど

こにも考えられぬのではないか、——まして、工人の技術は……などと、わたしも高山の町びととして自慢したくなる。さいきん、屋台会館ができて、常時、三台ずつ展示され、評判もいいうだ。しかし、祭りのときに行つて、仔細に見にや話にならんのである。

いまは、多分に観光客のための「高山祭り」になっているが、わたしの子どもころ、祭りは町のひと、とくに子どもの楽しみのためにあつた。

男の子は「早よ大きうなつて、屋台へのせてもらいたい」とねがい、女の子は、一張羅のちりめんやお召の袂の着物に、鈴のついたば、つくりがはける。小づかいも、はずんでもらえた。

春の山王祭を皮きりに、飛驒は祭りの季節にはいる。派手で賑やかな「春の宣言」だ。一年じゅうで祭りのない月は、二カ月しかないといわれるが、たいがいの月には、飛驒のどこかで祭礼が行なわれている。

そして、この「高山祭り」の演出にも、それにつづく古川祭りの「起し太鼓」の裸祭りにも、飛驒提灯は、大きな役割をうけもっている。

高山・山王祭りの試楽しぐとよばれる十四日の夜と、八幡祭りの夜祭りには、屋台に、数十の提灯をつけて町じゅうをねりあるく。その明りが、宮川や江名子川に映つて、揺れ動く

情景は美しい。祭り囃子や屋台の曳き別れの唄が、きこえてくると、家のなかに、じっとしていられない。胸をときめかして屋台のあとを、どこまでもついて歩いたものだった。

お神輿行列の道すじの氏子の家々では、家紋をウルシで染めた竹スダレを垂れ、宵がたからは、花笠提灯に、明りをとます。麻裃、紋服を着けて、一文字笠をかぶった屋台の警固の衆も、家紋をかいた提灯が、よく似合う。

夏は高山

——夏の高山は、涼しくていいですよ。東の乗鞍岳登山の基地だし、御岳、槍、穂高、黒部源流の雲の平や、西の加賀の白山も近いし。そうすすめると、友人は笑いだす。

——秋は、八幡さまの高山祭りで、紅葉の山や温泉がたのしいし、冬はスキーでしょ。

——そんなら、いつもいい、フリー・シーズンってことになるじゃない。

——それは、そう。だけど、じっさいに飛騨はいいんなら、しかたがないじゃないの。

夏は、六月はじめの乗鞍岳山開きにはじまる。

登山バスは、ブルドーザでのけた雪のトンネルをくぐって、三千メートルをこえる乗鞍山頂に近い、八合目の^{たみだい}畳平まで登っていく。全国第一の登高バスである。

六月中旬には、アユ釣り解禁。七月には、北アルプスの飛驒側の山開き。

八月は、ひと月おくれの七夕まつり。

男の子は、この地方独特の祭壇を川ばたにつくり、女の子は、ほおずき提灯ぶらぶら、「七夕のかーんじん、また来年ござれ」と、唄って街をいく。

つづいて松倉の絵馬市。八軒町筋の絵馬屋へ、紙に刷った木版画の絵馬を買いに行く。それから、陣屋まえや、町のところどころで、盆踊りがはじまる。赤いみだらし提灯が、踊りのある場所の目じるしだ。

——おどるたわけに、見るたわけ

そいつを笑うやつあ、なお、たわけ

朝顔提灯の下に、「チヨコチヨイト——」と、足さばき、手ぶりもたのしげだ。やぐらにも、賑やかに提灯がついている。

ふるさと文化の証し

おかしいいかたかもしれんが、たとえば、「街のまんなかを流れる宮川に、大きなコイやマスが、ゆうゆうとおよいでいる」それが、公害のない飛驒の山都・高山の看板みた